

## ワカメ育苗漁場で新たに確認されたメジナ類

環境増養殖担当 棚田教生

**Key word:** ワカメ、育苗、食害、メジナ類、撮影

### はじめに

ワカメの育苗漁場では魚類による食害が常態化しており、養殖用種苗の不足や生長の大幅な遅れなどの影響が出ています。

このため水産研究課と国立研究開発法人水産研究・教育機構は、2018年度からタイムラプスカメラを用いて鳴門海域における食害実態の調査に取り組んでいます(邵 2024)。これまでの調査では、アイゴとクロダイがワカメ種苗を食べるような行動を2018年度に初めて確認しました(棚田ら 2018)。その後、ワカメ種苗の周囲に多く出現する魚類としては、アイゴ、クロダイのほか、ウマヅラハギが確認され、水槽実験の結果も考慮すると、これら3魚種が鳴門海域における主要な食害魚種であることがわかってきました。

しかし2021年度に実施した調査では、これまでほとんど撮影されなかったメジナ類が新たに多数出現し、ワカメ種苗を食べるような行動も確認されましたので、その結果をご紹介します。

本研究は、農研機構生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」の支援を受け、国立研究開発法人水産研究・教育機構の研究チーム及び新鳴門漁業協同組合の生産者と共同で実施しました。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

### 調査方法

小鳴門海峡の2地点(土佐泊水の浦、堂浦)で、ワカメ養殖筏に種枠とタイムラプスカメラを取り付け、1分毎に撮影しました。水の浦では2021年11月12日に、堂浦では同年10月26日にそれぞれ撮影を開始し、両地点とも2022年1月25日に終了しました。

### 調査結果

2地点で撮影した画像を確認した結果、種枠の周囲に出現する魚類としてはクロダイ、メジナ類、ウマヅラハギ、アイゴが確認されました。

メジナ類は、比較的水温の高い10月下旬から12月中旬にかけての期間に連日のように出現しました。1日あたりの撮影尾数の最大値は、水の浦で11月17日に80尾、堂浦では11月21日に58尾となりました。メジナ類は単独または10尾までの群れで出現することが多く、ワカメ種苗に群がったり食べるような行動も観察されました(図1、図2)。

通常ワカメの育苗期間である11月末までで集計すると、両地点ともにメジナ類の出現尾数が全魚種の中で最も多くなりました。撮影されたメジナ類は、写真の種枠のサイズから、全長20cm から30cm 前後の個体と推定されました。

その他の魚類では、11月末までではウマヅラハギ（図3）がメジナ類に次いで多く出現し、12月以降は両地点ともクロダイが多く出現しました。堂浦では真冬の1月15日（日平均水温10.6℃）でも種枠の周りに4個体のクロダイの群れが観察されました（図4）。一方これらとは対照的に、これまで主要な出現種であったアイゴは著しく減少し、わずかに出現したのみでした。



図1. 種枠に群がるメジナ類  
（水の浦 2021年10月29日）



図2. 種糸に接近するメジナ類  
（堂浦 2021年11月20日）



図3. ウマヅラハギとメジナ類  
（水の浦 2021年11月18日）



図4. ワカメ幼体に群がるクロダイ  
（堂浦 2022年1月15日）

### おわりに

メジナ類については、2019年に堂浦で一度だけ3尾撮影されたことがあったものの、今回のような頻度および規模で出現したのは4年間で初めてのことでした。2021年度になってメジナ類が多数出現した理由については不明ですが、少なくとも現在の鳴門海域のワカメ育苗漁場で、メジナ類が新たな食害魚種となっている可能性を示す結果が得られました。また2022年度にもメジナ類の出現が確認されています。

今後はアイゴ、クロダイ、ウマヅラハギだけでなく、メジナ類の出現動向とワカメ種苗に対する食害の実態についても注視していく必要があります。さらに、主要な出現種であったアイゴが2021年に激減したことや、今後新たな植食性魚種が出現する可能性なども踏まえると、育苗・養殖現場での出現魚類の調査を継続し、基礎的な知見を蓄積することが重要と考えます。

### 参考文献

棚田教生, 多田篤司, 手塚尚明, 清本節夫(2019) 養殖漁場でワカメ種苗の食害魚撮影に初めて成功. 徳島水研だより第109号

邵花梅(2024) ワカメ養殖場における植食性魚類の出現. FRA NEWS 第77号